

学会ニュース

日本女性学会

第14号 1983年5月

第4回総会等のご案内

代表幹事 藤 枝 滯 子

新緑がまぶしく陽光に照り映える爽やかな5月、今年もまた、日本女性学会のご案内をする時期になりました。

今年は従来と少し趣を変え、国立婦人教育会館を会場に二日間にわたって総会を開催いたします。(詳細は別記をごらんください。) この機会に日ごろ接触の少ない会員同士、討論をかわし、親睦を深めあえればと思います。

かえりみますと、法政大学で開かれた設立総会は、つい先ごろのことのようでもあれば、すでに遠い昔のことも思われます。発足当初の熱い意気込み、高い志からみますと、学会に少し沈滞の気味がみえてきてはいないでしょうか。日本女性学会は全国組織ですから、構成員が一定地域内に限られ、それゆえ比較的交流の場をもちやすい団体と違い、運営にそれなりのむずかしさを当初からかかえています。4年目を迎えるにあたり、心を新たに、今後の学会の活動のあり方、方向を模索していこうではありませんか。会員の皆さま方から活発なご発言をいただきたく存じます。

総会に引きつづき、午後からはシンポジウム。それぞれの分野でご活躍の方々を発題者に迎えたこのシンポジウムは、女性学に新たなひろがりや深まりをもたらすものと確信しております。夜は、会員の研究発表と、会員の親睦交流にあてられる予定です。

二日目は、はるばるカナダから来てくださるマイル・ヴェルテュイさんの講演を予定しています。題は「世界における女性学の発展」の予定です。ヴェルテュイさんは、コンコーディア大学付属ボーヴォワール研究所の所長。同研究所は、大学内の女性学センターであるだけでなく、全カナダのセンターといっても過言ではないでしょう。昨年8月の国際女性学会議—略称「モントリオール'82」(学会ニュース第9号参照)—を主催したのもこの研究所です。世界80数カ国から350人の人びとが参加したこの会議は真に国際的なフォーラムとなり、日本からは会員の矢木公子さんをはじめ数名の方が出席されました。この会議開催の中心になられたのがヴェルテュイさんです。また、コンコーディア大学には、世界でも珍しい女性学学生会という学生団体までできています。ヴェルテュイさんは前日から参加してくださる予定なので、この機会に大いに交流を深めたいものです。なお、総会の議事の他は、すべて公開ですので、会員以外の方々をもお誘いください。

当日は受付で83年度会費を申し受けますので、どうぞご用意ください。また総会にご欠席の方々、会費滞納のあるの方々、会費納入にどうかご協力をお願いいたします。

総会・シンポジウム・講演会プログラム

期 日： 6月11日(土)、6月12日(日)

会 場： 国立婦人教育会館

※ 会場への交通機関は、ニュースレター前号を御参照下さい。総会への御出席は、東武東上線池袋駅発小川町行特急8時50分発特急、または9時20分発急行が便利です。

第1日目(6月11日)日程

総 会 午前11時～12時

1. 開会の辞 松原純子 司会 福井浅子
2. 経過報告 桑原糸子
3. 会計報告 小林富久子 (会計監査 三木・岸野)
4. 活動方針演説 藤枝滯子
5. 閉会の辞 白井堯子

公開シンポジウム 午後1時～5時

テ ー マ 「フェミニズムと学問」

司 会 矢木公子・溝口明代

シンポジスト 哲学の立場から 村上益子
文学の立場から 小林富久子
社会学の立場から 田中和子
心理学の立場から しまようこ

分科会 午後7時～8時

「女性解放と体育・スポーツ Mason: 'On the utility of exercise'(1827)

に関する一考察」 大河内保雪 司会 亀山美知子

「女性の identity 確立における身体性についての一考察」 平川和子

司会 漆田和代

フリートーキング 午後8時～10時

「日本女性学会の今後のあり方(仮)」

※ なお、この場には、マイル・ベルテュイさんにも御参加いただく予定です。

第2日目(6月12日)日程

「世界における女性学の発展」

シモーヌ・ド・ボーヴォワール研究所所長 マイル・ベルテュイ

司会と通訳 藤枝滯子

※ 公開シンポジウムおよび講演会は、一般参加者からは参加費として、各500円を申し受けます。

※ 参加御希望の方で、お申し込みが未だの方は、宿泊希望の有無とともに、至急事務局宛に御連絡下さい。(ニュース・レター前号同封の葉書を御利用下さい。) 宿泊施設の関係上、5月25日ごろまでをお願いします。

公開シンポジウム 「フェミニズムと学問」 発表要旨

「フェミニズムは哲学にどのような影響を与えたか」 村上 益子

哲学の分野ではフェミニズムの影響はほとんどない。まず価値説の上で、科学や社会や、宇宙全体を論ずることが高尚で、個人の運命や、個々の情熱のあり方を論ずることはつまらないことと考えられている。たとえば、マルクスの婦人解放理論にしても、公的な場に女性も平等に参加することをもって良しとする傾向である。この公的な場を優先させる考え方自身がすでに男性的発想である。ここには女性独自の価値説またはそれに基づく世界を創りだそうというような発想は全くない。大なり小なり哲学者は、世界を論ずることをもって足れりとする風潮があり、個人を基点とする発想に欠けている。個人と個人との親密な関係を主題とするような傾向に乏しい。女性哲学者、アンナ・ハレントは政治経済の社会よりも、私的個人の自己活動を上位に置いている。またボーヴォワールは、単に親密であるばかりでなく、“真実の他者”をどう把握するかということを課題としている。また女性固有の独特の世界の描写に関しては、エンマ・ユングのアニムスとアニマの分析がある。外国では以上のような女性思想家の独自の業績があるが、日本の哲学界では、男性・女性を問わず、アカデミックな研究の流れを追うのに精一杯の状態である。かりに女子学生が哲学を志望しても、出世前の身分でそのような女性テーマ的を撰べば、まずその人の一生は閉ざされたものになってしまうであろう。

「フェミニスト文学批評」

小林 富久子

ケイト・ミレットやエレン・モアーズの先駆的業績に続く、おびただしい数の女性の視点を基盤とする文学研究・批評の試みは、近年、米国で「フェミニスト文学批評」と呼ばれる一つの独立したジャンルを形成するに至っている。

これまでのフェミニスト文学批評は、大別すると二種のグループに分けられる。第一のグループは過去の文学作品、あるいは批評における歪み、あるいは欠落を是正する種類のものである。著名な男性作家の描き出したステレオタイプの女性像への批判や、文学史上無視されたり、不当に低く扱われた特定の女性作家の再発見・再評価がこれにあたるが、これらは、概して過去の性差別主義的“男根的”批評への怒りに端を発する点に共通性がみられる。一方、もう一つのグループは、とくに最近のアメリカで顕著となっているものであるが、フェミニスト文学批評独自の価値基準を積極的に追求し、確立することを目ざす種類のものである。

後者の試みの中心的課題は“真正な女性像”とはいかなるものかといった問題や、“女性的文体”の可能性の是非に関する問題であり、それは結局、未だ女性研究者達の間で合意が得られていない“女性的特質”と“男性的特質”の差異に関する果てしない論議に我々を引き戻すこととなる。注目すべきことは、こうした問題意識が今日の批評界において女性のみならず、従来の価値基準に行き詰りを感じている男性にも共通のものであることである。

以上のように、本発表では主として米国におけるフェミニスト文学批評の動向を明らかにすることを通して、今後の文学研究とフェミニズムの関わり合いについての展望・問題点について考察してみたい。

1960年代後半から70年代へかけての女性解放運動が生み出した“フェミニスト意識”は、他の人文・社会諸科学同様、それまで科学的中立性を標榜してきた社会学も、実際には「男性社会の男性科学」であった事実を明らかにした。

本報告では、フェミニスト意識によって透視された既存社会学の問題点のいくつかについて検討を加え、その克服の方向を探りたい。なお、時間の制約上、とくに以下の三点に報告焦点を絞る予定である。

1. 社会学における女性の不可視性、あるいは女性存在の“自然化” 産業社会の学問として出発した社会学がはらむ問題性をめぐって。
 2. 社会学における認識主体と認識対象 女性研究の特殊性をめぐって
 3. 女性社会学の課題 女性の視座からの社会学をめざして
- 以 上

心理学のパラダイムの変換と女性学の発展 — 自然科学的モデルの克服 —

し ま よ う こ

心理学ほど一般の人びとの知識と研究者の知見の間に大差のない科学はないかもしれない。しかし心理学に期待する内容と方法は、現実には両者の間で大きく隔っている。心の科学ではなく行動の科学としての現代心理学が貢献したのは、「ひと」の成長・社会参加・ライフサイクルの型はめ作業のみであったのかという皮肉な見方も生じる。その根本的な原因は、心理学のパラダイム（概念的枠組、一群の仮説、信念、それらに関する方法論やテクニックなどをふくむ）が、自然科学をモデルとした行動主義を中心に発展し、現在は多少の柔軟性を含みつつも依然として exact science の地盤を固守している点にあると言えよう。ここ数年間の日本心理学会大会で発表された研究を概見すると、女性学的視点が研究の本質を方向づけたと推察されるものは皆無に近い。また1982年に創立された日本人間性心理学会の初年度の研究発表においてさえ、行動主義モデルは臨床心理学的自己実現に焦点を変換するにとどまり、女性学的着想は見られない。現代心理学を批判的にスケッチした西ドイツ・アメリカの体系的な研究書においても、明確な女性学的視点は採り入れられていない。近年、「性差心理学」「自立の心理学」など女性学と問題を共有する領域のポピュラーな心理学書は数多く出版されているが、筆者の社会的態度は男性主導型社会の現状に挑戦することなくその補完・強化に読者を巻き込む危惧に満ちている。このような現状の背後に散見される原因を現代心理学の性格と関連づけて追求しながら、いかなる心理学のパラダイムの改革が女性学研究の方法と手を結び得るかについての一提案（実験・実証的研究と規範的研究の関連、男性原理・女性原理の概念の明確化など）を試みたい。

分科会発表要旨

「女性解放と体育・スポーツ “Mason: On the utility of exercise” (1827) に関する一考察」
大河内 保 雪

Miss Mason は、女性として、世界で最初に女子体育書を出版した人物である。そこで彼女の論文について、女性解放とのかかわりについて分析し、19世紀初期のイギリスにおける体育・スポーツと女性のかかわりについても分析を行なう。

「女性の identity 確立における身体性についての一考察」
平 川 和 子

「フェミニスト・セラピー・なかま」というカウンセリング・ルームに所属し、女性の神経症治療にたずさわってきた。そうした臨床経験からみた、女性の identity 確立と解放のイメージを模索してみたい。

事務局からのお知らせ

・国立婦人教育会館より

婦人教育国際交流事業 国際セミナー

傍聴者募集のおしらせ 58年6月13日(10時)～14日(17時)まで テーマ「婦人の社会参加と生涯教育—地域活動と婦人の役割—」参加者4カ国8名、傍聴募集100名(全日参加)申し込み締め切り4月30日(土)、詳細は国立婦人教育会館情報交流課まで

・「日仏女性資料センター」設立のお知らせと入会呼びかけ

会員の田中喜美子さんより

フランス文化に関心をもちその担い手たるフランス女性の生き方を知りたい方
フランスの女性問題を研究している方
国際的視野に立つ女性問題の把握の必要を感じている方
究と国際交流、相互理解のためのセンター。

} 両国の女性問題研

・寄贈図書、資料

JAUM 128号、129号 大学婦人協会

VOICE OF WOMEN No.35, 36, 37 日本女性学研究会

「近代日本看護史における看護婦の社会的地位・評価に関する研究」連載第32回、33回

看護 Vol.34・No.14、Vol.35・No.1 亀山美知子

月刊 婦人展望 83 2月号、3月号婦人会館出版部

婦人情報センターだより No.12、東京都婦人情報センター

婦人教育情報 No.7 国立婦人教育会館

VOICE OF WOMEN No.38 日本女性学研究会

INTERNATIONAL REVIEW Vol. V. No.4 渥美育子氏より

Ikuko Atsumi 「New Roles for Japanese Women」を所載

「ラマーズ法を“体験”して」北沢杏子 読売新聞S58. 3. 29

・新入会員紹介

山本有紀乃 不二出版 足立 恵 東洋シネマ

田川健三 大阪女子大学教授 女性論

田中由布子さん、富森豊子さん、根本郁子さん、黒田節子さん、櫛引順子さんの新たなご住所を御存知の方がいらっしゃいましたらご連絡下さい。

・一部の幹事からの提案・要望

日本女性学会という組織の要、私達の理念、私達が作っていかようとしている女性学について、会員が議論する機会を持ちたい。(誌上での意見交換でも)

・会員の皆様へのお願い

すでにニューズレターの誌上で何度かお願い致しておりますが、現在、会費滞納者が漸増しております。この問題は私共の組織を運営してゆくうえで重大な支障をきたすおそれがありますので、どうかよろしく御協力を頂きますようお願いいたします。なお、会の運営につきましては、皆様にとって有意義かつ魅力あるものとするべく、鋭意検討してゆきたいと思っております。上記の提案とあわせて、皆様の建設的な意見をお待ちします。

編 集 後 記

京都は葵祭りを終え、日一日と夏らしくなっております。日本女性学会は新たな年度を迎えようとしています。設立以来4年の歳月を経て、いま新たな模索期にさしかかったといえましょう。この“おのきと期待”の中で、直面する問題に目をそむけることなく進んでゆきたいと思っております。

(亀 山)

発 行 日 本 女 性 学 会

〒103 東京都中央区八重洲1-4-21

共同ビル13F 西洋美術研究会内

電話 03-274-1791